
白黒の歴史と巻き込まれる者

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白黒の歴史と巻き込まれる者

【Nコード】

N0416Z

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

ある方のザ・インタビューズで綴られていた物語のアフターストーリーを作りました。この作品には断層キャラが登場しますが悪人ではないのでご安心ください。

「これはもう一つの東方永夜抄」

第一話 無題

ある朝、俺様は白いウサギに囲まれていた。

そこに自然の魔術師が来て、白ウサギたちを蹴散らしてくれた。

その者の名は「台風」と言われ、侵略者を排除している。

俺様はその時、台風の魔法を見ていた。

白ウサギに殴られた衝撃で意識がもろろろとしていた。

「自然魔法台風の15の魔法陣、カマイタチ！」

巨大な雲が、ブーメラン状になりそして一部が鋭い刃に変わった。

「なんだ、あのブーメラン。」

台風は、そのブーメランを投げた。

白ウサギの一匹がただのブーメランだからと言って近づいたその時、

その白いウサギの首がもげた。

その血が他の白いウサギにかかった。

「まずいぞ!」「自然の魔法使いに殺される・・・」「死にたくねえよ!」

台風は白いウサギにこう言った。

「侵略を企む寄生虫ども、この星から立ち去らぬのなら容赦はしないぞー!」

白ウサギの中にこの事を言われて怒りを爆発させた者がいた。

「無礼な奴、良いだろう容赦のなさをこちらも見せてやる!野郎ども台風という魔法使いと黒兎を切り捨てい!」

「はっ!」

剣を持った白ウサギは、台風達に襲いかかったが・・・

「さあ来い。俺を殺せるもんなら俺の家具たちを殺してからにしてみろ!お出でなさい、福井平野東縁断層帯の金津と松岡。」

召喚とともに震度1の地震が発生した。

「お呼びですか台風様。」

「白ウサギを懲らしめろ!」

「刀を持った白ウサギですか。分かりました。」

「なに、二人も増えたか。」

「俺達にかかれば」「こんな奴等、血みどろにできる。」

「殺れ!」「おおおおお!」

「断層恐れぬとは、馬鹿な奴だ。」

金津は、右手から小刀を出した。

松岡は小刀を合体させて大きな剣にした。

そして、しばらくは見せられないほどの血飛沫があがっていた。

金津と松岡は、返り血を浴びてビクトリーポーズを互いに取っていた。

「これが断層の絆の力だ。」

「連動すればM8ぐらいは平気で行ける。」

白ウサギの大将は、素早い動きで二人の断層を払い除けた。

しかし、台風は魔法陣を開いていた。

「自然魔法台風、クロス突風！」

Xの字を描く突風が白ウサギに襲いかかった。

「がは！」

白ウサギは、急激な圧力に心臓をつぶされて死んでしまった。

「ご苦労だった。断層達よ。」

「はっ!」「台風様の言う通りにはなんでもいたします。」

「うん、それでいい。」

松岡と金津は、元の場所に戻った。

黒兎はしばらくして目を覚ました。

「自分の家。」

「気がついたか。」

「あなたは、誰ですか?」

「台風、自然の魔術師という者だ。」

「自然の魔術師、つまり魔法使い。」

「そうだが、うわあ!」

黒兎は涙を流し台風に抱きついてこう言った。

「助けてくれてありがとうございます。」

「礼を言うなら、金津と松岡に言ってくれ。なっ!」

震度1の地震とともに現れた。

「はいそうです。すべて我々がやりました。」

「松岡、少し白いウサギの血が付いているぞ。」

「おっと。」

第一話 無題（後書き）

次回 第二話 悲しみのある物語、そして地球侵略がはじまる。お楽しみに！

第二話 悲しみのある物語、そして地球侵略がはじまる

黒兎は、目を背けた。

どうやら血を見るのが嫌のようである。

「どうした。血を見るのが苦手だったか。」

「みゅー、月で血をたくさん見続けたせいで怖いんだ。」

黒兎は、悲しい過去があったことを知っている。

「松岡、拭けよ！」

「分かったよ金津。」

台風は黒兎にこう言った。

「宮城県に行きたくないか。」

「えっ……」

「唐突ですまない。だが、台風の魔術は風の力を利用すればワープが可能である。金津と松岡は下がってよいぞ。」

「はっ！」

黒兎は台風に言った。

「白ウサギはきつと俺様の仲間に害を及ぼす恐れがあると思うので
す。ほつとけないから宮城県へ行きたい。」

「そうか。自然の力に吹き飛ばされずにしっかりと捕まっている！」

風のでワープした二人。

宮城県では、白いウサギが暴れていた。

迷犬は白いウサギを知っていた。

「こっくんの言ってたウサギ。」

白ウサギは迷犬を見た。

「こいつが、黒兎と仲のいい奴か。ぐふふふ。」

「来ないで。悪いウサギさん。」

「何を言う、悪いのは黒い方だよ。さあこっちに来なさい。」

「捕まったら、殺される。」

「お出でなさい。巨理断層、長町利府断層、円田坪沼断層よ。」

巨理断層が迷犬の前に立った。

「誰だお前は。」

「活断層だ。悪さをしているのはどっちだ。寄生虫が。」

「寄生虫・・・無礼な言い方をする奴だ殺す！」

鎌が一気に巨理断層に襲いかかった。

「終わった・・・」

迷犬は、巨理断層が巨大な剣で鎌を止めているのを見た。

「黒兎、此処は見ない方がいい。円田坪沼断層よ迷犬を頼む。」

「了解、台風様。」

円田坪沼断層は迷犬を救った。

「ごっくん！」

「迷犬さん！」

二人は出会って喜んでいた。

円田坪沼断層は巨理断層に言った。

「畏が仕掛けられているのかもしれない。気を付けてください。」

「分かっているって、大型の剣よ更に進化した姿を見せ吾の右手に舞い降り給え！」

巨理断層はより大きめに進化した剣を振り回した。

白ウサギたちは必死に逃げて、もその剣に襲われ血だらけになって行った。

台風は黒兎に雲で作った目隠しをあげた。

「自然に逆らう愚か者がたどる末路は地獄のみだ。」

長町利府断層は、台風に近い付いてくる白ウサギを弓矢で射ぬいていた。

「地震を起こす黒幕だって、星を守りたいという気持ちは当然ながらにして当たり前ですから。」

そして争いが終わり、3体の断層は元の場所に戻った。

しかし、血まみれの大地を見たくない黒兎は目隠しをずっとしていた。

台風が目隠しを強制的に外した。

「台風さん、何するんだよ。こんな光景見せないで。」

黒兎はそんな場所が怖くて涙が出始めていた。

「すまない。だけど真実を知りたいから目隠しを取ったんだ。」

「分かった。迷犬さんも知りたいと思うし。」

黒兎は過去に月にいたことを話した。

話が佳境の時、惨劇を言いたくても言葉にできなかった。

「それでね、うっ、ごめんなんかさびしいというのもあるかもしれないこれ以上言えなくなってきた。」

「仲間を失う気持ちは、確かにつらい。これ以上は言わなくていい。」

「台風さんの言つとおりだよこっくん。」

「うん。」

古多糠断層から台風に報告が入った。

「大変です。根室市で白ウサギの大群が住民を襲っています。」

「分かった。俺もすぐそこに行く。」

迷犬と黒兎は台風に伝えたいことがあった。

「私たちが根室に。」

「分かった。黒兎は血を見るの怖いなら隠れていればいいぞ。」

「俺様、頑張つて耐えます。」

「そうか、ワープするぞ。」

根室では・・・

古多糠断層と網走湖東方断層が戦っていた。

「数が多すぎる・・・」

「自然魔法台風36の魔法陣、ウィンドリオンインパクト！」

巨大な突風が直下型に落ちて白ウサギを1500羽分蹴散らした。

「来たようだな。」

第二話 悲しみのある物語、そして地球侵略がはじまる（後書き）

次回 第二話 魔法体系「誘導」発動。お楽しみに！

第三話 魔法体系「誘導」発動

網走湖東方断層と古多糠断層は空を見上げた。

台風と迷犬と黒兎がやってきた。

「根室市民を困らせている寄生虫。」

白いウサギたちは、その言葉に殺意が芽生えた。

「何だあの人間、殺してやる！」

「そう来るか。ならば返り討ちにしてやる。上空の雲達よ槍となつて脅威を滅ぼしたまえ。」

雲が槍となつて白いウサギたちに襲いかかった。

「ぎゃー！」

白いウサギの体を貫いて突き刺さる雲の槍は、赤黒く染まっていた。

黒兎は我慢していた。

「こっくん、我慢しなくてもいいよ。」

「迷犬さん。でもこれを見なければ俺様の仲間達に報告ができない。それが成し遂げれば死んでいった仲間達が報われると思うから。」

「網走湖東方断層と古多糠断層、後は任した。」

「了解、台風様。」

台風達は、別の場所で暴れている白いウサギがいるところへと向かった。

「白いウサギがあんなにたくさん。」

「台風の魔法でも流石に・・・」

「ああ、だが迷犬さんからも俺と同じ空気がしている。魔法使いの空気が。」

「えっ！」

黒兎は少し驚いている。

「うち、魔法が使えるのかな？」

「君は、誘導と原初の魔法が使える。自然の魔法を使う俺だからわかるのだよ。」

「いた。白いウサギたちが。」

「寄生虫は、俺に任せろ！自然魔法台風の20の魔法陣「煉獄百景」！」

黄金の雲が檻の形となり、白いウサギ150羽を捕まえた。

「あいつ、俺たちを閉じ込めたな。」

波の剣から5mの波が水平に襲った。

「ぎゃああああ！」

一匹の白ウサギは垣根に当たり死亡した。

6匹は耐えて、うまく逃げきれていた。

「くっ、こんな攻撃を。」

別の場所からも白いウサギが現れた。

「こっくんが危ない。」

迷犬がそう思い目を閉じた瞬間、黒兔の手に盾が現れた。

「こ、これは。」

「ウチが目を閉じた途端に現れたの？」

「原初の魔法が発動した。迷犬、それが君の二つ目の魔法だ。二つ目を発動させて見せてくれないか。俺は、あっちを殺る。」

「分かった。」

迷犬が目を閉じた後、突然4か所からゲートのようなものが現れた。

そこから、水色の猫と黄色の犬と黄緑色のトビウサギと赤色のキツネが来た。

「なるほど、誘導の魔法か。ならばこちらは家具を呼び出すか。」

台風は、三方断層と佐保田断層と岩坪断層を召喚した。

「全面戦争だ。家具どもよ！」

「台風様の命ずるままに行くよ！」「おう！」

「ライム、レイキー、トピ、ひのまる！」

迷犬は、自分の作り出した物語のキャラクターに出会えて喜んで
いた。

「ちっ、余計な仲間が増えたか。」

白ウサギも仲間を5000羽にまで増やした。

「こいつ等、数を多くした方が勝てると思っているらしいぜ。」

「まっ、バカバカしいわ。数を増やした程度で負けることが明白な
のに。」

三方断層と岩坪断層の言うとおりである。

ライム達も参戦し大乱闘とった。

「自然魔法「台風」、クロス突風！」

白ウサギを蹴散らしていく中、黒兎は盾で自分に返り血がかからな

いか心配しながらも隠れ続けていた。

「まだ終わらないのかな。みゅー。」

「自然魔法台風の66の魔法陣、悪夢の竜巻！」

「吾等のナイフよ、超覚醒！」

岩坪と三方と佐保田は、ナイフから形を変えた武器を持っていた。

岩坪は、剣を。三方は、アイスピック型の剣を。佐保田は、鉞を。

アニフレ達は、時間が立つたので元の世界に戻ってしまった。

「ウチの魔法は限界があるのか。」

黒鬼の持っていた盾も消えた。

「魔法に限界があるのは当たり前なこと。自然も誘導も原初にだって発動時間の限界がある。対象者の疲れや焦りが見えるだけで。」

台風がそう言うのも無理はない。魔法には限界があるのは確かである。

残り600匹の白ウサギをどう倒すつもりなのだろうか。

三方達が頑張っているが、彼らにも疲れが見えていた。

「まずいな。断層達も疲れが見えている。」

黒兎は、一匹の白いウサギを見た。

「あいつは……」

「見つけたぞ黒兎！」

「させるか。自然魔法台風の2の魔法陣、最大瞬間風速地獄！」

「ぎゃあああ！」

三方達は退散した。

「残り450体か。自然の魔法も次第に力を落ちてきた。」

「ウチは二つの魔法でちょっと疲れちゃった。」

「さあ、三人を一斉に殺してやろうか。」

大ピンチのように思われたその時……

「台風郷が教えてくれた。無限の魔法の力で白いウサギを倒す。」

右代宮音米詩栖つしろみやねめしすという少女が現れた。

台風とは何やら関係のあるキャラのようである。

「私は今宵のベアトリーチエ。音米詩栖……いえ、ネメシス・ベアトリーチエよ！」

「やっと来たか。第三次右代宮家財閥当主。」

「浅宿さん、いえ、台風郷のおかげです。」

第三話 魔法体系「誘導」発動（後書き）

次回第四話無限の力、白ウサギを火に包む。お楽しみに！
突然登場した。右代宮音米詩栖ですが詳しいことは12月連載の二
次創作「うみねこのなく頃に外」で明かされます。こちらもお楽しみに
期待！

第四話 無限の魔法、白ウサギを火に包む

突然現れたのは、右代宮家の人間であった。

「台風、どういふ関係が。」

「放せば長くなるが助かった。」

「私に後は任してください。浅宿智也さん。」
あみやとこまなり

「ああ！」

45体の白ウサギがナイフなどを持って襲いに来た。

「ネメシス・ベアトリーチェ郷、頼むぜ！」

「分かってます。」

黄金の杖を振り翳したネメシス・ベアトリーチェは、地面から針山を出した。

「串刺し、先代たちが好きなわけが分かりましたわ。」

台風は、自然の魔法を安定させるため、水分を取っていた。

「さあ、白ウサギたちよ。耳を食いしぼりながら死んでいきなさい。ふつうはできないけど・・・。」

どこかで聞いたセリフに近いことを言ったが気にしないでおう。

「5体分の白ウサギには火をプレゼント」

「ぎゃあああ！助けてくれー！」

「火炙りされなくなったら逃げなさい。寄生虫が！」

「寄生虫だと！」

「逆に怒らせちゃった。だつたら食らいなさい。」

ネメシス・ベアトリーチェは白ウサギに火を投げつけた。

「ぎゃゃゃあああ！助けてくれえええええ！」

「黒兎さんの命や地球は渡す気はないわ。さあ、炎の洗礼を受けて死ね！」

白ウサギは、炎にのみ込まれ最終的には焼死した。

黒兎は自分の鼻をつまんでいた。

音米詩栖に戻り、みんなに手を振って帰って行った。

迷犬と黒兎は、台風にあることを言った。

「私たちを浅宿家に連れて行ってください。」

「よし、良いだろう。」

台風達は、風力でワープした。

ワープした先は、福井県であった。

そこには白ウサギが8羽隠れていることに全く気がつかない台風達。

「おお、三尾断層。お出迎えありがとうございます。」

「台風様が此処に来ることを察知いたしましたので、お出迎えに私が行くことにしました。」

「お邪魔します。」

黒兎と迷犬は、目をキラキラさせていた。

「浅宿家ってこんなに凄いのか。」

「右代宮一族とも親密であり、大昔、水戸のご老公様と仲が良かったりとすごい財閥なんだぜ。」

「可愛い……」

浅宿塗嘉が迷犬達を見た。

「塗嘉か。ちょうど良かった、こちらは迷犬と黒兎だ。」

「よろしく願います。」

「超可愛いよ！兄さん、こんなに可愛いのは初めてだよ。」

「塗嘉がこれほど喜ぶとは想定外だったぜ。」

しかし、8羽の白ウサギにこれらがばれていた。

「大将、奴等を見つけましたぜ。」

「おお、でかした。午後11時50分頃に攻めに行くぞ。」

「了解！」

第四話 無限の魔法、白ウサギを火に包む（後書き）

次回 第五話 狂おしき作戦、混乱の中のチェックメイト。お楽しみ！

第五話 狂おしき作戦、混乱の中のチェックメイト

迷犬と黒兎は、浅宿家のおもてなしを大いに受けた。

「たくさん食べたよ。」

「ごっくん、ちょっと食い過ぎだよ。」

浅宿家当主、心好は智也に言った。

「活断層達も色々世話してくれているが、白ウサギのことをどうするつもりだ。」

「まあ、簡単に言えば白ウサギには罰が必要だ。心をもたねえ、寄生虫には自然の罰が必要だとな。」

「まっ、面白いことだ。」

活断層達は、迷犬と黒兎と一緒にゲストルームにいた。

塗嘉と芝川断層はチェスをしていた。

「こんな手で来るのか。」

芝川断層は、頭を掻いた後、作戦を思いついた。

「ごう、動かせば形勢逆転。」

「なにっ!」

「少し油断したようだね。」

「ふふ、勝負はこれからもう一度、形勢を覆すわ。」

松岡断層、金津断層、古多糠断層、早乙女岳断層、鶴川断層、宝泉寺断層は、外に出ることにした。

「家具としての責任は大きいけどやりがいはあるよね。」

早乙女岳断層はポジティブな性格で富山県の断層の中でも最も陽気な断層である。

「宝泉寺断層と金津断層は、どう思うの?」

「いや、我々は断層らしく生きていればいいだけです。」

「少し陰気なところ、そこが好きよ。」

宝泉寺断層は少し照れ顔になっていた。

「誰がいるぞ!」

鶴川断層が右手にナイフを持ちながら言った。

「君達は、この事を台風様に。」

「はっ!」

「何人いるんだ・・・」

白ウサギは850匹にまで増えていた。しかも危険な武器も持っていたりする。

「なに、白ウサギが襲来してきているだと。」

「数はどれくらいなんですか？」

「塗嘉殿達も聞いてくだされば、1500ぐらいは居るかと。」

「1500羽か。大乱戦になるな。迷犬さん、魔法は出せますか？」

「はいっ！」

迷犬は、誘導の魔法でライム達を呼び出した。

塗嘉は物凄く喜んでいた。

「これなら、向かうところ敵なしですね。」

「まあーな。」

智也は台風に変わり、戦闘開始を合図した。

鶴川断層は、左額から血を流していた。

「このまま、逃げるわけにはいかない。超覚醒！」

鶴川断層のナイフは、二連発バズーカ砲に変化した。

他のみんなも駆け付けた。

「さあ、弾幕を放て！」

「よし、松岡断層と金津断層と宝泉寺断層よショータイムだ！」

「了解、台風様！超覚醒！」

剣が二つと大鎌が一つ現れた。

古多糠断層もナイフを超覚醒させて大鎌に変えた。

「さて、腸を抉り出して血の川で流してあげましょう罪と一緒に。」

「台風さん、俺様も戦いたい。」

「黒兎、良いだろう。雲の武器をお前にやろう。」

黒兎は、雲の剣を持った。

「永夜を超える戦いを此処で実現してやるぜ！」

「決戦だ。行くぞ！」

「おお！」

「私たちも入れてくだらない、台風郷。」

ネメシス・ベアトリーチェが台風のもとにやってきた。

「2週間後に親族会議があるけど、此の騒ぎでは会議どころじゃないわね。」

「ああ、そのようだ。ネメシス・ベアトリーチエ郷。」

「ならば私も家具たちを呼び出して大乱闘と行きますか。お出でなさい煉獄の七姉妹とシエスタ姉妹。」

「新しきベアトリーチエ様だけでなく、台風郷の仲間達の為にも活躍します。」

「活躍します!」

「では、始めましょうか。この永夜の戦いを。」

「面白いことになったぜ!」

ライムとレイキーは、白ウサギたちに攻撃した。

「鶴川断層、傷は大丈夫か。」

早乙女岳断層が心配していた。

「大丈夫だ。心配して損するだけだ。」

「そうか。」

松岡断層と金津断層は、白ウサギを剣で斬りつけまくっていた。

「此処まで、溶岩が騒ぐとは。」

「ああ、俺達も熱いんだな戦うことには。」

ルシファーとシエスタ410は連携作戦を取った。

「今だ!」「了解にえ!」

光の矢が、白ウサギたちを襲い、煉獄の七姉妹が杭に変わり高速移動で貫き続けた。

「俺も時には黒くなるんでね。」

台風は、自然の魔法の出力を最大にした。

その結果、服装が黒く染まった。

「黒き台風は、人の暮らす街を破壊するようにお前等も消してやる。」

黒くなった台風は瞬間移動して一匹の白ウサギに向かった。

「寄生虫は消え失せる!」

「何だと!」

台風の右手に黒い剣が現れた。

「必殺!伊勢湾斬り!」

白ウサギは、体をバラバラにされて死亡した。

「たわいもねえーな！」

黒兎は、白い剣で白いウサギたちを攻撃した。

「俺様だって非情になれる。」

迷犬は、原初の魔法を使い白ウサギを倒していた。

「疲れは見せたら負ける。此処は見せない。」

ネメシス・ベアトリーチェは、螺旋状の空間を作り出して白ウサギの首を絞め殺していた。

活断層達も戦い続けた。

そして白ウサギは全滅に見えた。

「ヴォルクス、俺の名は。」

白ウサギの大將の名は、ヴォルクス。厄介な魔法体系の持ち主であった。

「火焰」と「波浪」の魔法体系を持っているのである。

「此処は、台風様に任せよう。」

黒い台風は、ヴォルクスに挑戦することにした。

「お前を確実に殺す！」

「それができるかな。ふんっ！」

炎の波が黒い台風達に襲いかかった。

「雑魚だな。黒い嵐の中ではゲリラ豪雨の力で炎を消して目標に降り注げ、雲のナイフのゲリラを。」

突然大雨が降り炎が消え去った後、ヴォルクスは悲鳴を上げた。

ヴォルクスの体に雲のナイフが突き刺さっていた。

黒兎は青ざめていた。

「此処までしなくても・・・」

迷犬は少しあわてながら言った。

「ふふ、先代様と似たような殺し方ですね。台風郷。」

「ああ、先代達に見習い殺戮のショータイムを終了させたのさ。」

黒から白に変わった台風は少し疲れていた。

ライム達はもとの世界に戻った。

迷犬も疲れていた。

ふらふらになって倒れそうになったところを黒兎が抱いた。

「ありがとうございます。」

「あ、うん。」

ネメシス・ベアトリーチエは、台風の額を触った。

「熱があるわ。人間に戻った方がいいよ。」

「そうだな。」

台風は智也に戻った。

塗嘉がやってきた。

「兄さんお疲れのようですよ。」

「あなたは？」

「右代宮音米詩栖です。その節はどうも。」

「その節？」

黒兎は気にかけていた。

屋敷に戻り、台風と迷犬は寝ていた。

「私は、浅宿家エリートガードに助けられました。」

第五話 狂おしき作戦、混乱の中のチェックメイト（後書き）

次回 第六話六軒島をかけた戦い、右代宮の奇跡。お楽しみに！
これ以降は声優予想してくださいませても結構です。

第六話 六軒島をかけた戦い、右代宮の奇跡

音米詩栖は、智也に言った。

「浅宿家の助さんが助けてくれなかったら殺されていました。」

「浅宿家の助さんって？」

「せいじょうかたの西條語さんという方のことだ。今は次男一家の護衛ごゑいについている。」

黒兎は、音米詩栖に聞いた。

「私わたしがもう少し幼こどもかった頃、両親を須磨寺家の奴らやつらに殺されてしまいました。」

回想メタ世界

音米詩栖は須磨寺家に追われていた。

「来こないで、来こないで。」

泣なきながら音米詩栖は必死ひっしに逃にげていた。

須磨寺家の4人と護衛ごゑいが必死ひっしに追おいかけていた。

一人はライフル銃銃を持もっていた。

「これ以上逃にげたら、撃うち殺ころしてやるよ。」

しかし、浅宿家エリートガードの一人、西條語が音米詩栖を安全なところに誘い、命を救った。

「大丈夫かい、君。」

「ありがとうございます。」

「俺は、浅宿家エリートガードの一人、西條語だ。」

「私は、右代宮音米詩栖と言います。」

回想メタ世界終了

あの時、泣き叫ぶことしかできなかった私が少し情けなかった。

智也は起き上ってこう言った。

「そのあと俺が2009年の時、六軒島を見に行ったことは知っているだろ一緒に行ったからな。」

「はい、良く覚えています。大災害で崩れていた屋敷を復興したのは浅宿家と右代宮家の熱い絆という賜物ですからね。」

「そして復興した暁、お前を無限と黄金の魔女として認めた。」

これに関しては別の作品で紡がれている。

自然の魔術師により認められた無限と黄金の魔女、ネメシス・ベアトリーチェが誕生した。

塗嘉と智也は、会話をしていた。

「みんなが寝たわね。」

「ああ、そのようだな。」

「炎才のサユーシユさんから連絡がないのはなぜ？」

「白ウサギに捕まっているとしたらまずいな。」

炎才の魔術師サユーシユは、白ウサギに捕まっていた。

「黒兎のことを知っているのなら、言え！」

「それは言えない。誰なのかもわからない。」

「嘘つけっ！」

白ウサギはサユーシユを蹴る暴力をふるっていた。

「さあ、答える！」

口から血を垂らしているサユーシユは困り果てていた。

一方、台風は・・・

「越生断層と五日市断層よ。サユーシユがどこにいるかを探ってきてくれ。白ウサギに出会ったら容赦なく殺せ。」

「台風様、なぜサユーシユ殿を。」

「ほっとけないからかもしれない。頼む君たちに行ってもらいたい。」

「分かりました。台風様の命令ならやるしかありませんね。」

越生断層と五日市断層は、サユーシユを探しに行くことにした。

屋敷内では……

迷犬が頬を赤くして黒兎に言った。

「あの時、抱いてくださりありがとう／＼」

「う、うん。」

黒兎も頬を赤くしていた。

塗嘉は隠れてこう言った。

「ラブラブじゃん。ね、音米詩栖さん。」

「えっ、そ、そうね。」

音米詩栖は、少々困っていた。

第六話 六軒島をかけた戦い、右代宮の奇跡（後書き）

次回第七話サユージュを助ける！ゼルスゼミの行動力。お楽しみに！
新OPテーマ「魔法勇者の夢〜黄金の正夢になるまで〜」
新EDテーマ「クラシツクな形」
サントラも続々発表予定。

第七話 サユーシユを助ける！ゼルスゼミの行動力

サユーシユは体を震わしていた。

体のあちこちを蹴られ殴られて痛がっているのである。

白ウサギは、金属バットを持っていた。

「何をするんだ。」

「お前が語らぬなら役立たずということに殺す。」

越生断層と五日市断層は、サユーシユが殺されそうになっているところを見た。

「越生頼む！」「了解！」

ナイフで金属バットを破壊した。

「なにつ、金属バットが・・・」

「あいつらだ。殺るぞ！」

「五日市、任せたよ。」

「分かったわ。」

五日市は、両手にナイフを現した。

「さあ、融合！」

ナイフは合体して小刀になった。

「知ってる？自然の力は悪魔の証明にもなるのよ。科学では明かすきれない謎が多いって言うこと。」

「何言ってるんだこいつ。殺ってしまおう！」

「殺されるのは、あんたたちよ寄生虫どもが！」

「無礼者は殺す！」

「自然の脅威を教えてあげるわ。」

五日市断層は、小刀を地面に刺した。

「土を固めて、それを杭にして彼等を貫け！」

土が杭に変わり、白ウサギ2匹の心臓と脳天を貫いた。

「あーあ、綺麗な地面が寄生虫の赤黒い血で満たされたわ。まあ私のせいだけだね。」

サユーシユを抱いた越生。

「行きましようか。五日市断層。」

「そつね。」

生越断層達は、サユーシユを屋敷まで運んだ。

台風と小倉東断層がやってきた。

「サユーシユ殿、怪我していないか。」

「そつだな。」

翌日・・・

サユーシユが目を覚ました。

「此処は？」

金津断層が言った。

「気がついたかサユーシユ殿。」

「金津断層。ということは浅宿家の屋敷か。」

「そうです。台風様達は、朝っぱらから四国で白ウサギの大群と戦っています。」

サユーシユは、額のところの包帯を触っていた。

「触ってはいけませんよ。」

「すまない。」

サユーシユは白ウサギのことに苛立ちを覚えていた。

一方、台風達は……

高戸屋山断層達が戦っていた。

超覚醒された武器が、白ウサギの血を浴びていた。

北武断層は、槍で白ウサギの体を貫いていた。

宝慶寺断層と十万辻断層とタッグを組んでライフル銃で撃ちまくっていた。

「断層の力を見せてやるしかないようだね。」

「そうね。」

古多糠断層と高田平野西縁断層は、大鎌と大鉦を振り回して白ウサギの手足や首を飛ばした。

「私たちは寄生虫に殺されるはずがない。」

東海九次郎と東南海椿と南海鷗彦は、それぞれの武器で白ウサギを叩きのめしていた。

「はっ、俺!」

「どつした東海?」

「実は俺、気象庁にマークされているんだ。悪い意味で。テヘッ」

「お前な！それを言って笑えるジョークじゃないからな。」

「許せ南海。今回は連動はなしだ。」

「何の話になっているんだよ東南海！」

こんな三馬鹿トリオはほっといっておこう。

八雲断層は煉獄の七姉妹の2人、マモンとアスモデウスと手を組み
合い見事な連動攻撃で白ウサギたちを圧倒させていた。

ほとんどの者達は少し傷を負っていた。

台風は、自然の魔法で攻撃し、ネメシス・ベアトリーチエは無限の
魔法で圧倒し、迷犬は黒兎と一緒に待機していた。

「数が多すぎる。」「きりがないわね。無限の魔法で命を奪えどと
ことん現れる。」

白ウサギのリーダー「カタルシー」と「ムゲナ」がいた。

「奴等がリーダーか。」

黒兎は彼等を知っていた。

「あいつら、思い出した。俺様を助けてくれた黒いウサギたちを殺
した奴だ。」

「ええ！」

迷犬は少し驚いた。

「こっくん、それって本当？」

「そうだよ。僕の顔に軽く傷をつけたのもあいつらだ。」

断層達と七姉妹は、台風とネメシス・ベアトリーチェの戦いぶりを
見守った、

「さあ、来い！」

「死ね、魔法使いどもが。」

「自然魔法台風「狂い咲きの台風の花」！」

「いでよ、大西洋に沈んだアトランティスの住民の武器を降り注げ
！」

カタルシーとムゲナは避けた。

「自然魔法雷「追憶の絶望という名の雷」！」

カタルシーに命中した。体が灰と化して消滅した。

ムゲナは、黒兎の方に来た。

「しまった！」

迷犬が原初の魔法であわてて剣を作りそれをムゲナの腹に刺した。

「うち、殺っちゃった・・・」

黒兎は迷犬の突然の行動に驚いた。

「俺様を守りたかったのかい？」

「うん、うん。」

迷犬は困り果てた表情していた。

「さて、戻りますか。」

台風は、迷犬達と共に福井県に戻った。

サユーシュが台風に言った。

「台風郷、久方ぶりです。」

「サユーシュ郷こそ。」

第七話 サユーシユを助ける！ゼルスゼミの行動力（後書き）

次回 第八話緊急事態、須磨寺家との結託 part 1。お楽しみに！
白黒の歴史サウンドトラック season 1

- 1 ・紅の東
- 2 ・片羽
- 3 ・月から逃げた
- 4 ・Magia della natura
- 5 ・6 ・6 ・6 ・
- 6 ・苦しみ
- 7 ・2011年の…
- 8 ・黄金に輝く奇跡まで
- 9 ・頑張ろう
- 10 ・Amate la voce dei morti
- 11 ・蝶と自然
- 12 ・創造
- 13 ・呼び出せアニマルを
- 14 ・凍えて死にそうになったから
- 15 ・たくさん泣きなさい
- 16 ・赤黒い月
- 17 ・切ない心
- 18 ・覚醒した自然を止めれる者はいない
- 19 ・一途な風
- 20 ・活断層家具は忙しいよ
- 21 ・（
- 22 ・虹の西
- 23 ・骸の月OP1
- 24 ・ナニモナニモED1
- 25 ・黒いウサギ

- 2 6 ・悲しみ越えれば
- 2 7 ・へえー
- 2 8 ・みゆー
- 2 9 ・無理もない
- 3 0 ・チエツクメイト
- 3 1 ・宴で楽しもう、そして次の日に
- 3 2 ・断層達の戦闘
- 3 3 ・Mの奇跡
- 3 4 ・魔法勇者たちの夢OP2
- 3 5 ・クラシツクな形ED2
- 3 6 ・止んだ雨
- 3 7 ・悪戯
- 3 8 ・みゆーみゆー
- 3 9 ・New derision op3
- 4 0 ・闇の月は、きつと赤く染まるED3
- 4 1 ・タイフーン・ドリーム・ゴールデン台風のキャラソン
- 4 2 ・まっすぐ 金津断層のキャラソン
- 4 3 ・「 古多糠断層のキャラソン

第八話 緊急事態、須磨寺家との結託 part 1

迷犬は手を見ていた。

「うち、白いウサギをあれほど残酷に。」

黒兎は迷犬に言った。

「大丈夫だよ。あのタイミングで剣が現れていなかったらやられていたよ。」

「でも、黒い台風みたいに非情になるのは嫌だよ。」

「仕方ない。俺様を守ってくれたということにすれば誰だって非情になれることもあるんだよ。」

台風は、サユーシユに話を聞いていた。

「須磨寺家の生き残りが白ウサギの武器を所持しているだど！」

「この目で見た限りでは真実しか言えません。」

「そうか、これは厄介だな。」

ネメシス・ベアトリーチエは過去の記憶がよみがえりかけていたせいで頭を抱えた。

「大丈夫か。」

「ええ、大丈夫です。少しだけ頭痛がしただけ。」

一方、金津断層は須磨寺家の闇取引所に潜んでいた。

「よし、白ウサギとの交渉は成立したぞ。あとは武器が届くの待つのみ。」

「武器？」

金津断層はその場を後にすることなく見張っていた。

「白ウサギのスペースシップが来た。」

須磨寺家の護衛集団は、白ウサギと武器の検査をしていた。

「レベル3か。地球上で使うと家を2件こいつで壊せるという品物だな。」

「レベル3・・・」

金津断層は地球外武器の標準レベルを知っていた。

「この星はレベル2までが限界。レベル3は宇宙の法律に反している。これはまずい！」

金津断層がついに姿を現した。

「おいつ、寄生虫と人の子よ。その武器はこの場所で使うのはやめろ！」

断層というのは、人よりも階級が上位の存在、神に使えし者である。

「寄生虫はどつちだ！」

「人の子とか、わけがわかんねえぞ小僧！」

「俺は金津断層。お前等は理解してもできない存在。その武器も危険すぎることを知らないようだな。」

手にナイフを持ち戦闘態勢に入った金津。

「ふん、この銃で殺せ！」

金津は速度が速く、白ウサギから武器を分捕り白ウサギの目をナイフで刺した。

「ひぎやややあああー！」

「あいつ、とんでもねえ。」

「ひるまずに撃ち殺すぞ。」

金津は、銃に逆断層を生じさせた。

「お前達の体もこうしてやるつか。」

白ウサギは、金津に向かって銃を投げつけたが・・・

「ありがとうではさようなら。」

白ウサギの胸に銃弾が当たり、白ウサギは地面に倒れた。

金津断層は地割れを作り、その地割れを元に戻した。

白ウサギの肉片が彼らにかかり恐怖に陥れた。

「化け物だ。」

「ああ、こんな奴と戦ったら命が何個あっても足りねえ！」

須磨寺家の護衛は逃げたが・・・それは作戦であった。

白ウサギがそれを知らずに戦っていく。

金津断層は、白ウサギを剣で逆断層を作るかのように切り裂いた。

金津断層は急いで台風達のいるところへ向かった。

須磨寺家の一人、灰樹は、少し笑った表情を見せた。

台風達のところに金津断層がやってきた。

「やはり結託を。」

「そうです。どうしますか？」

台風は悩んだが答えが出てきた。

「一斉攻撃が考えられるから此処は殺るしかないな。」

「台風郷、良いんですか。」

「サユーシユ郷、この戦いはどうにかして終わらせなければ意味がありません。」

「確かにそうですが・・・あの迷犬さんにとっては少し残酷だと思いますよ。」

「大丈夫です。ウチこっくんを守るためなら、黒魔術にでも手を出すつもりでしたし。」

「ネメシス・ベアトリーチエ郷、君を参謀として迎え入れる。今回はやはりそれそのおの覚悟があることになるけど。」

「台風郷に言われたら、私も2011年のベアトリーチエとして頑張らなければいけませんので。どこかで先代様達が私の活躍を見てくださっているのですし。」

彼等は家具やアニフレの者たちを召喚して作戦を立てていた。

「こんな作戦でいいかな？」

ネメシス・ベアトリーチエは少しため息をついた。

シエスタ410その作戦を見ていた。

「これはいい作戦にえ。」

「ああ、素晴らしいこれだけの作戦であれば須磨寺家もギャフンと言えそうだ。」

「だが、実践は想定外も起こりうる。その際は失敗となる。」

「リスクも負わなければ、これだけの作戦は成功しない。」

ついにその時がやってきた。

屋敷を再び囲む白ウサギと須磨寺家。

「此処が正念場だ。」

「よしっ！」

平井断層と曾木断層は、刀を手にしていた。

「南海、作戦通りに動けるか。」

「島根沖、心配するな。問題はない。」

須磨寺家が先に手を出した。

断層家具たちが須磨寺家と戦った。

「超覚醒！」

ナイフから、剣や銃、鉈やアイスピックのような武器が出てきた。

「一気に攻めるぜ！」

「人の子の攻撃なんかには負けねえ！」

第八話 緊急事態、須磨寺家との結託 part 1 (後書き)

次回 第九話緊急事態、須磨寺家との結託 part 2。お楽しみに
!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0416z/>

白黒の歴史と巻き込まれる者

2011年12月29日13時52分発行